



当プレスニュースレターでは、東京文化発信プロジェクトの多様な事業を、さまざまな切り口からご紹介しています。

平成 23 年 3 月 10 日

東京文化発信プロジェクト室

(公益財団法人東京都歴史文化財団)

3月11日に発生しました東北地方太平洋沖地震の影響により、『キッズ伝統芸能体験』の発表会は中止となりました。

CLOSE UP
INTERVIEW

東京発・伝統WA感動 キッズ伝統芸能体験 ディレクターインタビュー

子供たちにこそ、本物を。 伝統文化の神髄を伝える7ヶ月の体験

7ヶ月という長期にわたり、子供たちが一流の芸術家たちの世界観に触れながら伝統文化の魅力を体感する『キッズ伝統芸能体験』。「東京文化発信プロジェクト」の一環として平成20年度に始まった本事業の意義、子供たちの成長、また伝統芸能の世界へ与える影響について、企画制作・運営を担当する(社)日本芸能実演家団体協議会(芸団協)の谷垣内和子さんにお話を伺った。

“本物の体験”が 伝統芸能の魅力をダイレクトに伝える

興味はあっても、どこか敷居が高いと感じていた伝統芸能の世界。もし機会があれば、子供には体験させたい、学ばせたいと考える人は多いのではないだろうか。

谷垣内さんは、伝統芸能の実演家たちが学校へ出向いて“出前授業”を行う芸団協のプロジェクトに平成15年からコーディネーターとして関与。

「能や狂言の独特な声の出し方、西洋音楽にはない箏や三味線の微妙な音色に、子供たちは新鮮な驚きや好奇心を示してくれます。しかし残念なのは、そうした一過性の体験だけでは、子供たちの興味を持続することが難しいのです」

伝統芸能の面白さをもっと深く知ってもらうには、どうしたらいいか。そんな模索を続けていた頃、「東京文化発信プロジェクト」の事業として子供を対象とした伝統芸能の体験プログラムの企画制作・運営を芸団協が担当することになったという。

『キッズ伝統芸能体験』を始めるにあたって、谷垣内さんが大切にしていたのが“本物の体験”だ。教える先生は、能楽、日本舞踊、箏曲、長唄それぞれの分野で実演家として活動する一流のプロフェッショナル。稽古場も、能楽であれ

ば「宝生能楽堂」、長唄は「杵家会館」などそれぞれの本拠地や地域の文化施設だ。稽古は9月から7ヶ月間、土曜・日曜も使って行われ、子供たちは先生のもとへ通う。

「こちらが子供たちに“近寄る”のではなく、子供たちを伝統芸能のフィールドに“引き寄せる”。ありのままの姿を体験させるほうが、子供たちの心に伝統芸能の魅力がストレートに伝わるのではと考えたのです」

背筋を伸ばすと音が違う、きれいに見える。 言葉ではなく体験で伝える意義

参加費は、全20回で10,000円。

「一回のお稽古が、なんとワンコインの500円です(笑)。もし子供が『やってみたい』と言い出したとき、お小遣いでも参加できるようにしたいと考えました」

伝統芸能の世界には様々なジャンルや流儀があって、初心者にとってはどれが自分に適すのか分かりにくいもの。『キッズ伝統芸能体験』では、芸団協が企画制作を担うことで、複数の実演家団体の協力を得ながら、幅広く、より標準化したプログラムを実現していることが大きな特徴だ。

【P2に続く】

たにがいと かずこ
谷垣内 和子

『キッズ伝統芸能体験』ディレクター。武蔵野音楽大学大学院修了。(社)日本芸能実演家団体協議会(芸団協)芸能文化振興部、花伝舎業務主管。2003年より芸団協の「伝統文化と教育プロジェクト」における「実演家と教師による和楽器モデル授業出前教室」コーディネーターを務める。



「家元制度のイメージに代表されるような、部外者には分りにくい“敷居”を取り払い、伝統芸能の世界に入りやすくしたかったのです」

プロの稽古は子供たちをぐんぐんと変えていく。

「子供たちの成長するパワーは本当にすごい。大人だと理屈で考えてしまい、なかなか習得するのが難しいことを、乾いたスポンジが水を吸い込むように覚えてしまうのですから」

最初の頃は5分と正座ができなかった子でも、稽古を続けるうちに姿勢がしっかり整ってくる。

「三味線や鼓などの邦楽器は、姿勢の善し悪しでまったく音色が変わってきます。踊りでも、どのような姿が美しく見えるか子供たち自身にも分かる。口で何度も言うより、『姿勢が良いと違うんだ』と自覚できるのは、日本の伝統芸能の特徴でしょう」

先生たちも、子供だから初心者だからという手加減はしない。

「プロの実演家としてのご自分たちの世界を真っ向からぶつけて教えてくださっていると感じますね。先生たちも一回一回が汗だくの真剣勝負。そうして厳しく教え、できたときには思い切り褒める。子供たちも達成感が大きいから、またがんばろうと思えるようです」

そうした先生への敬意、足を踏み入れただけで背筋が伸びるような稽古場の雰囲気、道具や衣装を大切に扱うといった習慣を身につけることも、子供たちの心に確実な変化をもたらすという。

「保護者の方も『うちの子がこんなに一つのことに取り組めるなんて』と驚かれるほどです」

学校では教室の雰囲気になかなか馴染めず保健室の常連だった子供が、稽古は休まず参加し、プログラムが終わった後も「練習を続けたい」と個人的に先生を探して入門したという例もあるそうだ。

「子供が習い始めたと聞いて『おばあちゃんも、お箏を習っていたのよ』『あの長唄は歌舞伎のあの演目で使うのを知っている?』といった会話が生まれる。世代を超えたコミュニケーションのきっかけになるのも、長い歴史を持つ伝統芸能の良さではないでしょうか」

発表会はあくまで通過点。

伝統芸能の見巧者を一人でも増やしたい

そうした厳しい稽古の成果をお披露目するのが、3月21日（能楽）、29・30日（長唄、箏曲、日本舞踊）に開かれる



杵家会館にて長唄囃子（太鼓）の稽古

発表会だ。“本物の体験”を重視する『キッズ伝統芸能体験』のコンセプトどおり、会場も宝生能楽堂と浅草公会堂という大舞台。衣装やセットも本格的なものが用意されるという。

「家族やお友達などの観に来た方も『こんなに本格的な舞台になるとは』と驚かれるほどのステージになりますし、出演する子供たちの達成感も大きいものです」

しかし谷垣内さんは、「発表会がゴールと思ってほしくない」と語る。「大切なのは7ヶ月間がんばって稽古をしてきた過程の経験であり、未来に向けても伝統芸能に興味を持ち続けてもらうこと。稽古場が違うので発表会で初めて他のジャンルの演目に触れて、さらに興味を広げることもできます。伝統芸能の世界では見る目のある良い観客を“見巧者（みこうしゃ）”と呼ぶのですが、そんな見巧者が子供たちや周囲の皆さんから一人でも多く育ってくれたら嬉しい。それが『キッズ伝統芸能体験』の目標のひとつですね」

指導にあたる先生たちの間でもジャンルや流派を超えて交流が深まったり、子供や初心者に向けた独自の体験プログラムが企画されたりと、伝統芸能の世界にも新しい息吹を呼び込んでいる。

子供たちの心に蒔かれた伝統芸能のタネが、体験を通じて大きく育ち、発表会でその実がはじけてタネがまた広がって——。『キッズ伝統芸能体験』は、そんな豊かな東京の未来を予感させる事業だ。

3月11日に発生しました東北地方太平洋沖地震の影響により、『キッズ伝統芸能体験』の発表会は中止となりました。

一方的な文化発信ではなく、 互いの文化を交流させることが願い

近年の“韓流ブーム”の影響も手伝って、よりいっそう身近な国となった韓国。

そこで、韓国と日本の文化交流の橋渡し役である、韓国文化院の文化弘報参事官・コン・ヒョンシクさんに、東京の印象や日本での文化発信についてお聞きました。



コン・ヒョンシク

孔 炯植

駐日本大韓民国外使館 文化弘報参事官。米国ウイスコンシン大学マディソン校を卒業。韓国大統領府の海外弘報行政官、国連韓国代表部文化弘報官などを経て、2010年8月より現職。

店主と交わす会話も東京生活の楽しみ

——昨年8月に来日され、東京での生活はいかがですか？

妻と9歳の娘と一緒に初めての東京生活を楽しんでいます。実際に暮らしてみて感じることは、東京はきれいで安全・安定した都市だということ。それに人々も親切ですね。

食文化の面では、豊富な種類の飲食店がありますし、関西料理や九州料理といった地方料理を東京にいながら楽しめるのがうれしいですね。また、こぢんまりしたお店では通ううちに店主と親しくなり、個人的な話も交わすようになることも。そんな交流も東京生活の楽しみのひとつです。

それから、“お祭り”も好きです。私の住んでいる麻布界隈ではたくさんお祭りが催されますが、地元の人たちが準備段階から関わり、自分たちで作りに上げています。できあがったお祭りを楽しむだけでなく、作る場所から参加することもできるんですね。韓国のお祭りは実行委員が企画・準備を行い、それを楽しむというスタンスなので、こうした地に根付いた“みんなのお祭り”は印象的です。

——日本の韓流ブームをどのようにお感じですか？

これには大変驚きました。来日前から話には聞いていましたが、一時的なものだと思っていました。ところが実際に日本のメディアを見てみると、毎日のように韓国の芸能人が取り上げられていて、「ああ、本当だったんだ」と（笑）。

ここまで日本のみなさんに受け入れられたのには、1998年の日本大衆文化開放政策が大きく影響しています。韓国は古くからの文化も大事にする一方、海外の文化を受け入れることに積極的な気質もあります。ですから日本文化についても、それらを受け入れることで日本人の文化的趣向を感じ取り、新しい文化を創りました。それを日本に“輸出”した結果が、この韓流ブームなのだと思います。日本と韓国の若い世代は、互いの文化に大変関心を持っています。彼らが世の中を背負う年代になった時、両国の友好関係はさらに深まるのではないのでしょうか。韓流ブームもそのきっかけのひとつになるといいですね。

目指したい「東アジア文化」の世界発信

——文化発信を行う際に留意されていることは？

韓国の文化を日本に紹介するのにあたって一番大事なことは、私たちの文化を一方的に発信するのではなく、互いの文化を交流させること。ですから、主催するイベントには必ず日本人の作家やアーティストを招き、交流の場を作るように心がけています。その結果として、韓国文化院が日本のみなさんから愛される存在になれば嬉しいですね。実際、日本のアーティストたちが韓国で日本の文化を発表する機会も増えていきますから、文化交流という意味でもよいことだと思います。

——韓国文化院が主催する講座は、語学クラスやお茶、子供向けの韓国文化教室など多彩ですね。

毎月2～3回、無料で開催している「子供文化教室」は、遊びを通じて韓国語や文化を学べる講座です。例えば、歌や踊りで体を動かしながら会話を覚えるなど、楽しみながら吸収できるよう心がけています。韓国文化に興味のあるお母さんが、子供を連れてくることもありますよ。

2013年には、私たちのビルに韓国観光公社などの機関が入ります。それによって旅行に役立つ最新情報が入手できるようになります。また、語学クラスを増設するほか、伝統楽器や舞踊の新講座も検討中で、ここに来れば韓国の文化が総合的に分かる、学べるという場にしたいと考えています。

——グローバル化する世界の中で、独自の文化を発信する価値について、どのように思われますか？

その点においても、一方的な文化発信にならないことが大切です。例えば、韓国と日本、中国は共有している文化も多いので、この3カ国が文化的な協力を強めて「東アジア文化」を新しい潮流として世界に発信できたら面白いのではないかと。欧米のアーティストがそうしたアジアの文化から何らかのインスピレーションを得て、彼らの作品の中に、一時のブームではない“アジアの風味”を見ることができるようになったらいいですね。